

もう一つの場所を夢見る

——津島佑子『山を走る女』の社会的再生産をめぐる交差性

三林 優樹*

インターセクショナリティが小説に表現されるとき、それはどのような形を取るのだろうか。本稿では、従来ジェンダー越境性が主に論じられてきた津島佑子『山を走る女』について、ジェンダーとも深く関わる出産・保育の表象とアイヌをはじめとする先住民の表象を、同時代の社会状況を踏まえつつ、社会的再生産をめぐる交差性の問題として論じる。出産・保育の表象においては、福祉レジームの脆弱性のなかから、産む女性や保育当事者の経験・声を歴史的かつ状況的にすくい上げ、構造のなかで共同的に運営していく試みを見出すことができ、先住民の表象においては、戦後の〈弱い父〉というアボリアを乗り越え相対化する批判性が読み取れることを論じる。そして以上のような戦後の福祉レジームの内部の修復と、それを賦活する外部の交差との流れのうちにある思考法が「夢」として書かれていることを、津島作品の小説技法として位置づける。

キーワード：交差性、出産、共同保育、弱い父、先住民

1. シングルと先住民の交差

津島佑子の作品を語るとき、シングルマザーやフェミニズムのテーマを見逃すことはできない。従来、「産むこと」の母性の重視によって、第二派フェミニズムと同期するウーマンリブによる母性批判とのすわりの悪さを指摘されてきた津島作品であるが、近年では再評価が進んでいる（木村2021）。

本稿で論じる『山を走る女』（『毎日新聞』夕刊、1980・2・12～9・13）も、そうしたテーマに連なる作品だといえる¹。八の章段で成り立つ本作の梗概を示しておく。二歳の多喜子は望まない妊娠から子どもを出産し、晶と名づける。晶は戸籍に父の名前が記されない「私生児」だった。多喜子は家族と同居しているが、障害年金で生活をしている暴力的な父や、子どもの中絶を主張していた母との折り合いは悪い。晶を育てるなかで自活しようと保育園探しに奔走し、ようやく私設の共同

保育所である「みどり保育園」を見つけるが、保育時間の都合で仕事と育児の両立は難しい。晶のヘルニアが見つかるなど家族との不和も進行していく。幾度の転職を経て、観葉植物のリース会社である「三沢ガーデン」に就職した多喜子は障害をもつ子どもを育てる神林に出会い好感を抱くが、関係を結ぶには至らない。最終的に晶のヘルニア手術が成功し事なきを得る、という筋立てである。

本作は、津島がはじめて手がけた新聞小説である。『寵児』（1978）の「処女懐胎」に表現されるように女性の妊娠を独自に形象化してきた津島だが、本作はライフステージの進展とともに出産・育児を取り上げるようになった作品として作家論的には位置づけることができる（津島1979）。

よって先行研究では、母親としてのあり方と関わって、「私生児の母親」である「山姥」の形象が「シングル」的だとして注目されてきた。津島は本

* 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

作について、「私生児の母親」とは何かを探りたいとし、「つまらない都会の約束ごとに縛られて生きるしかない人たちの、自然に即した、たくましいエネルギーへのあこがれが表れているように思われます」と述べている(津島 1980b)。ここから、「山姥」という形象の「ジェンダー越境性」(小林 2002)や、「シングルマザー」性(尾形 2006)という作家的な主題が論じられてきた。

折しも、1980年代はシングルの生が話題となった時期である。椎野若菜は、女子差別撤廃条約批准に向けて男女雇用機会均等法(1985)が施行された社会状況について、キャリア女性が増え始めていたことが女性のシングルライフの可能性を伸展させたとして整理している(椎野 2014: 5)。『光の領分』(1978)や『黙市』(1982)など、津島作品はこの時期から積極的にシングル女性を主題に据えるようになるが、後述するように女性たちの共同的な声を記す本作もまた、シングル女性の経験を扱うフェミニズム的な視点をもつ、時代と同期する作品といえるだろう。

しかし本作はそうしたひとつの図式だけに収まるような小説ではない。先行研究では上記の「山姥」や「シングル」が注目されてきたが、「ギリヤーク」(ニヴフ)をルーツにもつ神林との交流を描く本作は、後に「ジャッカ・ドフニ——夏の家」(1987)や『真昼へ』(1988)などを端緒として、晩年の『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』(2015)に至るまで継続的に主題化される、アイヌをはじめとする先住民のテーマを早くに描き込んだ重要なテキストでもあるからである。アイヌを中心としたテーマは津島研究において近年活発に論じられているが(鈴木 2019; 村上 2020; 藤田 2025)、そのテーマをより早期に描いた作品として本作も注目されるべきであろう。津島作品における先住民アイヌへの関心については、大学時代の興味や子どもとの家族旅行といった津島自身の経歴、あるいは動物の表象におけるアイヌの自然観との共鳴といった思想的枠組みとの関連が強調されてきた。しかし本作では出産や育児のテーマとの連続性が特徴的であり、先行研究とは別の視点から論

じることが必要である。

すなわちポイントは、「産むこと」や「育てること」といったシングル女性の社会的再生産をめぐる経験と、先住民アイヌへの憧憬がどのようにテキストで交差しているのかということである。シングル女性や先住民といったマイノリティの声を表象で重ね合わせる本作は、それらを積極的に主題化してきた津島作品史のみならず、その交差において文化社会史においても重要なテキストであるだろう。そのため本稿では、本作における出産や育児の社会的再生産と、先住民をめぐる状況がどう具体的に切り結んでいるのかという同時代の問題も共に抑えたい。そのことによって、後年に津島作品が主題化する先住民のテーマと、この時期の作品がもつ出産・育児のモチーフが潮の目のように接合されている本作を、戦後史のなかで鳥瞰的に位置づけることを目指す。

本稿の視点である交差性についても述べておきたい。インターセクショナリティの訳語である交差性は、ブラック・フェミニズムの知見から発展し、社会構造において複合的に働く権力関係を統合的に分析するための概念である(Hill et al. 2020=2021)。現実社会における差別や抑圧がひとつの構図から機能するのではなく、ジェンダー、人種、階級、障害、経済などの諸要素が同時に絡み合い機能する状況を別括する視点だといえる。本稿では交差性を分析視点として採用しながら、それが文学的にどのように表象されているのかについて論述することにも主眼をおきたい。なぜならば本作の重要性は、社会的再生産をジェンダーや人種などの社会構造から描きつつ、人物や場所、想像力といった物語的要素との重なりにおいてその意味を文学的に拡張している点にあるからである。シングルとして育児をする多喜子は他者としての神林と出会うことで変容し、再生産を賦活する新たな場所や想像力を見出していく。ここからは1980年のテキストが示す具体的な社会的立場とともに、交差性を文学的に表象する本作の技法も見えてくる。このように本稿においては社会的再生産を社会構造のレベルから論じつつ、

それを表象の上で再配置してみせる文学のレベルからも同時に問いたい。

以下、まず作品の社会背景となっている福祉レジームの状況とその脆弱性について出産と保育の描写から論じる。その上で、津島作品では資本主義のもとでの福祉レジームの脆弱性、すなわち「ケアの危機」を男性の表象が形象化してきた点を挙げ、その危機の脱出を目指すものとして本作の男性性をめぐる描写が存在するという論点を提示し、障害をもつ子どもを育てる父親や、アイヌや「ギリヤーク」といった先住民との関連から論じる。よって前半では出産・育児をめぐる社会的再生産について女性ジェンダーに焦点化された脆弱性と抵抗力、後半では男性ジェンダーとの関与において再生産領域を再配置する力学を論じる。このように本作を出産・育児や民族、そして男性性の表象が重なり合う視点から捉えることにより、福祉レジームの危機とそこからの脱出という社会的再生産の再配置を目指す上で、交差性が小説技法としてどのように書き記されているのかという問題が浮上するだろう。

II. 出産の管理化と保育の市場化

多喜子の育児が中心に描かれる本作だが、テキストがまず描写するのは出産についてである。注目したいのは、多喜子の出産が同時代の出産の管理化という社会状況と結びついていることである。はじめにこの点から、保育に至るまでの女性の疎外的な状況に迫っていきたい。

多喜子の出産はどのようなものだったのか。「夜更けに医者判断で」、「陣痛促進剤の点滴を受けた」（「真夏」）多喜子は自分の子どもの顔を見ておらず、暁方に聞いた赤ん坊の産声を思い出しつつ、「あれが自分の産んだものの泣き声なのか」と思っただけである。「赤ん坊は部屋の外に連れ出され」、「その時から、多喜子は赤ん坊を見ていなかった」（「森」）。明け方になって想起されるばかりの、子どもとの疎外が強調されるのである。

ジャーナリストの藤田真一は著名な『お産革

命』で、1960年代以降のお産を「第二次お産革命」と整理し、その眼目は「妊娠・お産の『安全管理』」にあったと指摘している（藤田 1988: 376）。自身の出産経験を元にそれを社会的に位置づける吉村典子もまた、陣痛誘発剤やガス麻酔などの新たな産科技術が、危険性も顧慮されずに女性の身体に使用されたことを批判している（吉村 1992: 185）。このように60年代以降は、出産が医療によって管理されるものに変容する。陣痛誘発剤が使用され子どもの顔も見られない多喜子の出産も例外ではなく、テキストは出産が医療管理によって疎外されている様子を描いているのである。

しかし多喜子は管理化された出産に埋没するだけでなく、同じような状況下にある女性との共同性を捉える視線をもつ。多喜子は産院で横たわりながらこう思う。

かなり古びた白い天井を改めて見つめているうちに、この天井のもとに横たわっていた何十年も前の女たちの姿が見えてくるような気がした。何百人、いや何千人、何万人の女たちが同じ天井を見つめて、横たわってきた。そのうちの一人が自分なのだ。多喜子は今まで味わったことのなかった充足を自分の身に感じた。思いがけない充足感でもあった。（「泣き声」）

このように多喜子の出産は安全管理のもとに医療によって囲繞されているが、しかしそのなかからコレクティブな女性同士のつながりや歴史性を発見する。多喜子は自身と歴史のなかの女たちの出産経験を結びつけ安心を覚えるのである。

安井真奈美は、1975年の国際婦人年を契機に発足した国際婦人年大阪連絡会が、1977年に「妊娠・出産に関するアンケート調査（第一次調査）」を行い、1979年に『出産白書』として刊行したことを挙げ、「医療施設で出産した女性たちの声が公にされ、医療を受ける側から『消費者』として異議申し立てが行われる」ようになったことを踏まえて、産む女性における新たな主体性を論じてい

る(安井2013:182-7)。ならば多喜子もまた、女性とのつながりを含む声をめぐり、それを主体的に位置づける視線を持ち合わせているのだといえる。管理社会によって圍繞され身体が孤立する出産の内部から、女性同士の身体をつなぐ契機を発見すること。テキストは多喜子のお産を描くことで、同時代の医療的に管理された出産の現場においても、産む主体からの抵抗があることを示しているのである。

出産をめぐる女性の状況は、保育の現場といかに接続されることになるのか。産んだ子の保育を求めて多喜子は「大学病院の職員のための託児所」を訪れるが、そこに至るまで「すでに三軒の保育所をまわり、申し込みをしていた」(「森」)。結局この託児所にも空きがなく、「みどり保育園という私設の共同保育所」で預かってもらうことになる。公立保育園は四月の年度初め前に入所を締切ってしまうために、夏に出産した多喜子はそこで保育をはじめすることはできず、私設・民間の認可外保育所に頼ることしかできないのである。

託児所の空きがない切迫した保育環境は、どのような社会状況がもたらしたものだったのか。仁平典宏は、福祉元年である1973年の状況について、拡充した社会保障が、家族福祉や企業福祉からの解放にはつながらず、介護・保育施設の拡充は進まないまま脱ジェンダー化の効果は微弱だったことを記述している(仁平2019:305)。また、萩原久美子はこの時期に保育所定員充足率が低下した状況を挙げ、1984年には全体で約16万人の定員不足と、東京都においては1987年時点で5274人の待機児童がおり、保育サービスが十分に供給されていなかったことを述べている(萩原2010:89-90)。このような保育の市場化による待機児童問題が、多喜子の保育所探しの苦労にも影響しているとみられる。保育のジェンダー化および市場化が進んだのが80年前後の福祉状況だといえる。

事実、その状況を確認するように保育所と対比的にベビーホテルについての言及がある。みどり保育園に子どもを預ける母親の一人は、「そんなに保育料が高くなってしまったら、誰も預けられ

なくなるわよ、それだけ払える人は、さっさと自分でベビー・シッターを雇っちゃうわ。ベビー・ホテルなんかと違って、ここはいずれ、認可を受けて、今の公立の保育内容よりもはるかに充実した保育園に発展させたいって」(「若葉」)と意見している。堂本暁子が述べるように、ベビーホテルが誕生する70年代後半は、認可保育所への入所希望者のほぼ半数しか入所でできず待機児童が急増していた(堂本2001:46-7)。1980年は、ベビーホテルでの幼児の死亡・障害事故が相次ぎ、TBSが報道キャンペーンを開始した年だった。堂本はそれを取材し、劣悪な保育環境にあるベビーホテル問題として可視化したのである。

本作の連載は待機児童や無認可保育所が問題になっていた時期に重なっている。そのなかで出産をめぐる管理化と保育の市場化が多喜子を圍繞しており、両者の環境が女性を疎外していく点を見出せる。そこからは、福祉レジームの脆弱性が構造的に存在する社会状況を見て取ることができる。

しかし産む主体性において多喜子の抵抗があったように、そうした環境下でも多喜子は育児に肯定的な視線を見出す。次節では共同保育の場面から育児をおこなう女性同士のつながりを論じる。

III. 共同性をめぐる声

保育をめぐる厳しい環境にありながら、多喜子はその間に肯定的な点を見出していく。先のお産の場面と同様に、保育での共同的な声をめぐる現場に多喜子は関わっていくのである。テキストの保育の描写を通した社会への批評的視点を次に論じたい。

多喜子の通う「みどり保育園」は共同保育所であり、厳格な規則と自主性を重んじる場所として運営されている。保育士は「こちらは、お父さんであれ、お母さんであれ、保母と協力してみなさんに運営して頂いているところですので、お子さんを預けるだけであとは知らん振り、という方は、こちらからお断りすることになっているんで

す」と釘を刺し、みどり保育園の成立事情から現在までの流れも説明しながら、「父母の会総会、それぞれの組の班会、そこで選出された委員の委員会、夏と冬の二回のパザー」に「原則としては、全部に出席してもらいたい」（「道」）ことを明言する。

共同保育所の自主性はどのような経緯で生まれたのか。橋本宏子は、60年代以降に運動として高まった共同保育について、無認可保育所を利用する家庭が共働き層となることによって、保護者の切実な要求が含まれるようになり、行政への陳情をくりかえす過程で保護者と保育者の政治意識が高まっていった経緯をまとめている（橋本2006:144）。よって「私設で共同の保育所」であるみどり保育園の厳しい規則や運営の高い自主性もまた、こうした保育所運動の隆盛から生まれたものであろうことが推察できる。

だが保育所の経営は厳しく、たとえばテキストでも「今年のパザーでがんばってみて、売上げが良かったら、保母を一人増やそう、という話が出て」おり、「なんの援助もなく、経済的にはいつも苦しいんです」（「森」）と語られ、保育士の人数も予算も足りていない現状が浮き彫りになっている。

その語りは現実の声とも共鳴している。やや時期は異なるが、保育運動のなかで膨大なビラやパンフレットとして出版されていた保護者の語りを見てみたい。「共働きの母ちゃんの日記から」という手記では、「無認可だということで市からは一銭の補助もない。だから保育所運営は火の車、高い保育料を払った上に、日曜日ともなると街頭カンパ、廃品回収、おにぎり作りで資金づくり。経営者がいなくて、父母、保母の共同運営だから、運営委員会、父母の会にと時間をさかねばならない。ただでさえ忙がしい共働き夫婦をよけい忙がしくさせる」（東海ジェンダー研究所 2016: 137）という切実さが綴られている。またある記述では、「保母からたくさんのボーナスの要求がありました。保育所として出してあげたいがお金がなく」、「お母さん達はしかたなく保母の要求を通す

ため7000円の負担をすることにしました。そのうえ土曜日の夜から泊まりがけでおむすびを作り、片手に赤ちゃんを抱いてどこかで集会があると瓦町保育所支援バザーをひらかせていただき、ジュース、サイダーを売りました」（東海ジェンダー研究所 2016: 166）と苦勞が述べられている。

こうした保護者の語りを見るだけでも、テキストの共同保育所での保育が経営の困難さをめぐる運動的な声と共鳴していることがよくわかる。『山を走る女』は、そうした語りを拾い上げている意味で、きわめて現実的なテキストだといえる。

しかし運動的な声を聞くだけではなく、テキストは苦境からの展望も描く。多忙のなか疲労する共同保育の現実にも、多喜子は肯定的な点を見出していくのである。

入園の時に、念を押された通り、ほかにも出席しなければならない集まりは多かったが、（……）しかし、多喜子はそうした機会に疲労は感じて、面倒に思うどころか、慌しい毎日のなかで楽しみにさえしていた。みどり保育園での晶の様子を聞くことができ、なごやかにほかの親たちが話を交わすのをながめていることもできる班会には、特に欠席したくなかった。（「冬」）

多忙で疲弊する現実でも、多喜子は保育での共同的な育児を積極的に享受しようとする。保育をめぐる現場からの共同性が浮かび上がってくるのである。

なおかつ、この共同性は運動的な声との共鳴という、社会と物語内容の接点だけに尽くされるものではない。それをテキストの物語言説の次元において確かめたい。テキストでは「冬」の章で晶の保育ノートがたびたび引用されている。地の文の語りとは全く異なる文が前景化しているのである。記してみると、「十一月一日（水）雨」の日においては、「6.00 ミルク 180cc」「8.30 登園 眠りつづけている。」「9.50 ウンチ／体操 乾布マサツ」「10.00 果汁 60cc／そろそろミルクの時

間だけれど、とてもゴキゲンで、手足を動かしている。」「10.45 ミルク 180cc／ウトウト夢みごちでのむ。のみ終わる頃、目をパッチリあける。／＼そうだ、ほく、ミルクのんでいるんだったなあ、／ベッドでお口パクパク。でも満足そうなお顔。＼晶君。と呼びかけると、ニコニコ顔。自分の名前がもうわかるのかな」というようなノートの引用がこの章では続いていく。内容的に登園前は多喜子によるメモ、登園後は保育者によるメモであることが推察できる。

たとえば「ここに、共同保育所時代の連絡帳がある。所々にたどたどしく消え入りそうな字で、娘の様子が書いてあるのにまず目が行き、一人赤面する。さらに頁を繰ると、保母の自信に満ちた子育ての様子が、ビンビンと伝わって来、その迫力に圧倒される」(新川中原共同保育所編 1981: 28-9)という同時代の保護者の証言を照らし合わせると、ノートの記述の重要性が明らかになるだろう。すなわち、ノートでは多喜子による登園前のメモと、保育者による保育時のメモが行を挟んで隣接している。テキストの活字ではそれらの筆跡の差異は消去されているが、保育者による子どもへの直接話法による焦点化や文体はそれが詳述であるほど、多喜子の簡素な文体のメモを逆に照射し、育児に忙殺されることによる多喜子の疲労を想像的に浮かび上がらせる。ノートにおいては、保育者と保護者の育児というケア労働のなかの差異と、それでいて子どもを介していることによる声の重なりが、ひとつの文章のなかで共振し重層化しているのである。つまりテキストの物語言説の次元でもまた、育児ケアにおける共同性を看取することができるのである。

確認しておけば、こうした連絡帳形式の記録である保育ノートは共同保育所に固有の媒体というより、認可保育所を含む保育所一般において広く活用されていた。たとえば保育記録は『保育の友』のような保育雑誌において、保護者と保育者のコミュニケーションによって子どもの成長を協力して見守るものとして議論されていた(新井 1985)。保育ノートは制度的に統一された運用があったわ

けではなく、その使用は各所の裁量に委ねられている。しかし特に共同保育所などの無認可保育の場においては、保護者と保育者が共同で運営する性格上、日々の子どもの様子やケアの内容を記録し共有するノートは、その共同的な実践を支える基盤としてより強い意味をもっていたと考えられる。よってテキストの保育ノートは、単なる社会状況の再現というよりも、共同保育での声の重なりを物語的に可視化する媒体として位置づけることができる。

このように保育の共同性の主題は、福祉レジームの脆弱性のなかから、出産・保育の経験や声をすくい上げ、脆弱性を共同的に修復し運営していく試みだといえるだろう。テキストは出産や共同保育の運動的な声と共鳴する性格をもち、そのことを物語内容や言説など複数の次元から証しているのである。

IV. 戦後の〈弱い父〉と交差性

共同保育を契機に、多喜子は共に育児をする父親としての男性と関係を切り結ぶ。「他の場所では会うことがなかっただろう男性なのに」、「自分と同じ些細な心配、離乳食や病気の心配を、保母に訴えている」(「冬」)場面を新鮮な姿としてみているように、新しい父親の姿が育児の現場から立ち現れることになるのである。津島が述べるように、「私生児の母親。をテーマに考えているうちに、結果としては、父親。がテーマになってしまったような向きもある」(津島 1980c) なかで、テキストでは様々な父の姿が見出せる。多喜子はどのように男性と出会い、それは戦後史においてどのように位置づけられるのだろうか。

ここまで論じてきた出産・保育をめぐる状況は、女性ジェンダーに焦点化された再生産領域の危機として表出している。しかし同時にそれは、男性ジェンダーが再生産領域から疎外されることによって成立している構造でもある。この点において、社会的再生産をめぐる問題は女性ジェンダーのみならず、男性性の問題とも連動している。そ

のことを本節で論じたい。

まず注目すべきなのは多喜子の父親だろう。多喜子の父は終始暴力的な人物として描かれており、その意味で典型的な家父長型の男性である。しかしふとした瞬間にその弱さを見せるときがある。たとえば、多喜子の妊娠を理解した瞬間、「眼の先にいる多喜子に、まるで許しを乞うような顔つき」になり、「なにかもっと別のことを静かに悲しんでいるような表情」(「森」)を浮かべるのである。この妊娠への葛藤をめぐっては、多喜子の母によって、その子どもを「自分の手に抱いてみたいと思っているに違いないのだが、不器用な性格だから、そうできるようになるまでに人の倍以上の時間がかかる」(「道」)と別の角度から説明される。妊娠にまで至る多喜子の性交渉を逸脱として詰る家父長的な怒りは理解しやすい。しかし妊娠をめぐって悲しむ父の表情は詳しく説明されることはなく、子どもに不器用な態度を見せる父親を多喜子は「受け入れることも、撥ねつけること」もできず「よく分からないこと」として受け取るほかない。テキストの父は社会的再生産をめぐって空所としての謎を抱えているのであり、そこに強い葛藤が根ざしていると読み取るべきであろう。ならばここから浮かび上がってくるのは、再生産領域から疎外された戦後の〈弱い父〉としての男性性ではないだろうか。

「塙のなかの子ども」(1973)など70年代の津島の初期作品を論じる飯田祐子は、シンジア・アルツァらによる資本主義がもたらす「ケアの危機」(Arruzza et al. 2019=2020)論を援用しながら、再生産領域における戦後日本の父親の弱さが存在する状況を看取しており、津島作品と戦後における父の弱さという論点を浮かび上がらせている(飯田 2022)。この「ケアの危機」とは本論文脈に則せば、福祉レジームの脆弱性といえる。その脆弱性からも共同性という肯定的な点を見出し生き延びていく女性たちの姿は論じてきたとおりだが、ならば〈弱い父〉としての男性についてはどのように現れているのだろうか。

暴力的な父の心情としては、「多喜子の月給の

額が自分の受け取っている障害年金よりも多いので、父親としては腹立たしいことに、我ながら意味もなく多喜子を痛めつけている心地になることが多かった」(「森」)のである。ならば多喜子の父は女性の妊娠という再生産領域からも、そして戦後の男性性の規範である生産領域からも二重に疎外されているというべきである。この〈弱い父〉を招いた原因は、大沢真理が述べるような、性別分業を特徴として家族福祉と企業福祉が相互補強する、日本型生活保障である「男性稼ぎ主モデル」からの逸脱にあることはいうまでもないだろう(大沢 2007)。多喜子の父親は稼ぎ主モデルとしての役割を果たすことができないために葛藤するのである。

「雨の日には、萎えた脚が痛みだす、ということ、家のなかでも便所に行く時以外には体を動かそうとしない。それが、大分前からの、父親の症状だった。どんな痛みなのか、誰にも理解できない。しかし、無視することはできない痛みでもあった」(「道」)と語られるように、父親は事故により右足が不自由になり仕事を辞め、障害年金を受給している。ここでは稼ぎ主モデルから転落した父の弱さが強調されている。男性は福祉レジームでは稼ぎ主の役割を強制されているが、そのモデルを実現できない多喜子の父には男性性の挫折による痛みと暴力性が如実に表れているのである。

ならばこの痛みを癒やすために父は何を行うのか。それが資本主義の純粋な結実である投機である。

父親は朝から、(……) 建売り住宅のパンフレットや、土地の売買に関するチラシを眺めていた。父親の手もとには、その類いの紙が、大きな紙袋から溢れるほど溜まっていた。父親の関心は、一年ぐらい前から、自分の小さな家売り払い、その金で田舎に広い土地を買ってアパートを建てることに集中していた。うまく立ちまわれば、今とは比べものにならない生活ができるようになるということ

だったが、母親はもとより厚さえ、父親のその思いつきに興味を持とうとしなかった。母親の父、つまり多喜子の祖父が、若夫婦のために、戦後すぐの時期に買い求めた、という家だった。〔道〕

テキスト発表年と同年の1980年を境とする地価の急上昇は、戦後地価高騰の第三の山である「狂乱地価」の段階に至る（都留 1990）。そうして投機の対象となった郊外の土地は、ロードサイドビジネスによって開発整備され、やがてそれらを取り囲むようにマイホームやマンション、アパートといったレンタル集合住宅が建設されることになる（小田 1997）。1973年の「日本列島改造論」や、土地の投機による郊外の開発によって戦後が瓦解し切り崩されていく現実。多喜子の父親が郊外の土地を求めるのも、戦後の変化の一コマを如実に示している²。父親は資本主義を純粹化した投機的な土地の売買によって稼ぎ主モデルとしての自分を取り戻そうとするが、家族には見限られる。資本主義の急進とケアの危機が袋小路のように折り重なり、父親のもとで体现されているのである。その痛みは癒やすことはできず、福祉レジームにおける戦後の男性性のアポリアを示している。

ここで対照的に目を向けたいのが、多喜子と関わる神林というもう一人の父親である。「一人の蒙古症の男の子の父親」である神林と出会った多喜子は、「自分の身も同じその時間のなかにあること」を「感じ続けていたいと思うように」なり、「自分が晶を産み、育てていることに、はじめて神林の存在によって、言葉を与えられた気がした」〔山〕と賦活される。多喜子にとって神林は、多喜子の父が示すようなアポリアに陥った男性性を象徴的に打開する人物として存在しているのだといえよう。

津島作品において、障害をもつ子どものモチーフは繰り返し描かれてきた。杉田俊介が述べるように、津島作品は社会によって周縁化されてきた障害児を描くことで、定型的な家族の輪郭を揺るがす存在を繰り返し形象化してきた（杉田 2017）。

ここで重要視したいのは、それに加えて本作によって重層的に語られることになる要素、すなわち神林自身のルーツである。祖父が「ギリヤークとかヤクトの連中と一緒に、セイウチを追っかけていたっていうんだから……。親父になると、もう、そんな話は聞けないけどね……」と打ち明ける神林は、「いろんな血が混じってるんじゃないかな、この体んなかに。アイヌとか、ギリヤークとか」〔山〕と語るのである。神林は障害児のケアを担いつつ、先住民的ルーツをもつ父親である。この点において彼は、民族、障害、男性性という複数の軸が交差する位置にいる人物であり、本作における交差性の具体的な体现者といえる。福祉レジームの脆弱性を育児ケアによって生き延びる神林は、戦後の父の世代を批判し乗り越えるような、障害や民族との交差の上に成立する男性であることが了解できるだろう。

津島自身、東北の最先端ではアイヌのなかにギリヤークも混じっていたかもしれないという主旨の論文をかつて読み、父親の出身地であることと合わせて「その子どもである私自身がギリヤーク人の子孫であると言えないこともな」く、「以来、ギリヤーク人の遠い、遠い子孫、という考えを捨てられずにいる」と北方の先住民への憧憬をたびたび述べている（津島 1980a）。また山口昌男との対談においても、1947年生まれ津島は「いわゆる文化人類学、エリアードとかメルロ＝ポンティとか、レヴィ＝ストロース、彼らの洗礼をまともに受けて、強い影響を受けている世代」であり、泉靖一や山本祐弘、知里真志保などアイヌ研究者を学んだことを明かしている（津島・山口 2000）。

津島も参照し、おそらく本作執筆時にも念頭にあった山本祐弘『樺太自然民族の生活』では、北方の先住民について、「一般には容易に近づけない原始的寒地環境であり、そこにオロッコ、ギリヤーク、いわゆるヤクトほか少数の北方自然民族が住み、崩れたとはいえ原始的生活を保有していた空間」であり、「いずれにしても現代に、現代と隔絶したこの世界は滅びゆく北方寒地民族の自由な世界であり、当時の日本の中での安息空間

であった」(山本 1979: 130)と強制的に記述されている。ならば、人類学ブームを参照しつつ、国民国家の外部を想像することで戦後の福祉レジームや男性性を相対化する試みとして、先住民とのミックスによる交差性を描いていくテキストの戦略がここにあるのではないだろうか。

日本の経済力の向上に伴い、「日本人」がどう見られているかという自意識の強まりによって日本人論ブームが到来したのが1970年代であった(小熊 1995)。国民国家の外部を積極的に主題化する『山を走る女』も、こうした同時代思潮へのカウンターとして位置づけられるだろう。事実、こうした自閉的な国民国家のなかでの日本人論ブームと対照的に迫り上がってくるのが、この時期のアイヌのアイデンティティの高まりであった。1968年の北海道百年記念式典の開拓賛美的な北海道史観への抗議運動としての、旭川アイヌ協議会(1972)、アイヌ解放同盟(1972)、ヤイユカラ・アイヌ民族学会(1973)などの結成や、1972年、第26回日本人類学会・日本民族学会連合大会に対して、アイヌ解放同盟がアイヌ研究の目的の公開質問状を提起するといった出来事、1977年、北海道大学経済学部アイヌ民族差別講義に対する結城庄司の抗議活動など、1980年直近のアイヌ民族活動史のなかで主な社会的出来事を参照するだけでも、このようなアイヌ文化やエスニック・アイデンティティの高まりがあった。それらの出来事は黒人反差別運動など世界的な民族・人権運動とも共鳴しつつ、アイヌの自民族運動をおこす大きな潮流となっていたのである(竹内 2020)。

神林が祖父からのルーツに自覚的でありそれを多喜子に語ることに、こうしたアイヌのエスニック・アイデンティティの高まりを透かし見ることができるだろう。それを受け止め、人類学的で民族的な交差性として表象したことに、運動的な同時代に応答するテキストの態度がある。先住民である「ギリヤーク」やアイヌに、福祉レジームの脆弱性や国民国家への批判性を託したことに主題が存しているのである。それは戦後の男性性を新たに接ぎ換えるものとして表象されており、先

住民の血を引く神林は交差性から、多喜子の父のような戦後の〈弱い父〉のアポリアを乗り越える新しい男性性をもつ人物として現れるのである。テキストの交差性は、脆弱な戦後社会を外部に接いで批判的に相対化し賦活させているのだといえよう。

しかし同時に注意をしなければならないのが、このような先住民への憧憬を反復する作家の言説を踏まえると、そこに先住民に対する、マジョリティの立場からの記号化の暴力性が含み込まれてしまう事態である。たとえば石原真衣はアイヌと和人の二元論的な構図から排除される「サイレント・アイヌ」の存在を記述している。「サイレント・アイヌ」においては社会の二元的な言説による分断で、一方的にアイヌや和人と名指され振り分けられることで自己の存在が不透明にされてしまうことを提起するのである(石原 2020)。後年の『ジャッカ・ドフニ』について、この「サイレント・アイヌ」の経験を援用しながら内藤千珠子が論じるように、マジョリティの物語とアイヌの物語を情動的なレベルで交錯、越境させたテキストの緻密さと比較して(内藤 2022)、本作時点での津島の先住民アイヌへの憧憬はやや一方向的な夢想であることは看過し得ない。

「ギリヤーク」やアイヌの表象に、脆弱な福祉レジーム男性性の乗り越えを企図したことに本作の主題があることはまちがいないようにおもえる。しかしその点にこそ、先住民を記号化することの暴力性があるとすれば、本作は恣意的な想像を記したテキストになってしまいかねない。ここに『山を走る女』における亀裂が露呈しており、その意味で両義的な作品であると位置づけられるだろうが、そこからテキストの可能性の地平をひらくことは不可能なのだろうか。

V. 夢という技法

テキストは、保育に関して内部から共同性を立ち上げる声、また先住民アイヌへの共感を伴った交差的な声というように、戦後史の運動的な声を

重ね合わせていた。ならば問題は、このような交差性が多喜子にとってはどのように想像されるのか、換言すれば構造的な交差性がテクスト的にどのように拡張し、表象されるのかという論点だろう。その点に、記号化の暴力を再考する余地もあると考えられる。テクストの文学的な交差性と小説技法の問題を最後に論じたい。

『山を走る女』は夢の語りが頻出する点で特徴的な作品である。冒頭から「眠りのなかで、その痛みは多喜子の名を呼ぶ声のように感じられた。呼ばれている多喜子は、幼ない頃が多喜子だった」(「真夏」)と始まるように、津島作品において夢はしばしば重要な象徴であることが多いが、それは本作においても同様である。

この多喜子の感じる痛みとは現実には陣痛を指しており、呼び声は赤ん坊の声と理解できるだろうが、しかし繰り返される他の夢や痛みの描写を考えると、それは別の他者性を帯びた象徴的な呼び声でもあることが浮かび上がってくる。

たとえば津島にとっては、夢と現実と同じ次元で存在しており、「外界からの働きかけがなければ夢も見ない」ものである。「私にとって夢というのは自己の中に閉じこもったもの」ではなく、「外界からの刺激に対する反応」だという(津島・菊田 1979)。夢が外界からの反応ならば、それは換言すれば他者との交差的な応答関係の表象とも理解できよう。津島作品にとって夢とは外界に対する志向をもち、他者への多義的な反応を描く技法なのである。

テクストに則して具体的にみていきたい。注目すべきは、多喜子の夢においては氷原が反復されることである。たとえば「インディアンの住む平原と同じように、どこまでも続く凍った海を、犬橇で走りまわる人たちが、ずいぶん高いところから見下ろすように、小さく、しかし、細かなところまではっきり見える」夢を見る多喜子は、「それから同じ夢を思い起こすたびに」、「氷の上の人たちへの憧れの気持を増していった。それは、自分で仕留めた海獣の毛皮で身を包んだ男たちだった。自分の産む子どもが男の子であればよい」

(「森」)という感慨を抱く。さらにこのモチーフは反復され、氷原の男たちと新たな子どもを産むことについての語りを生む。

多喜子は、雪原の光景を、また思い出した。そこを犬橇で走りまわる男たち。眩しく、一面に輝きわたる雪原を、ひとつの鋭い線となって、横切るもの。はるかな、夢のなかの光景。——しかし、多喜子は晶に聞かれたら、答えるつもりでいた。あの人たちのうちの一人が、名前なんか知らないし、どこに行ってしまったのかも知らないけれども、あたしに赤ちゃんを生ませてくれたのよ、それが、あんたなのよ。(「冬」)

氷原の夢は『氷原』(1976)や『寵児』(1978)などこの時期の津島作品に頻出するモチーフであるが、津島も「どの小説でも必ず「もう一つの場所」を求める人物しか書いていない」と述べ、『氷原』にしても、主人公は氷原に思いを寄せているわけです。(現在いる場所と『もう一つの場所』との)両方がないと、私自身リアルティを感じないんです」と主張している(津島・菊田 1979)。ならば、「もう一つの場所」としての氷原とその夢は、多喜子にとってオルタナティブなのであり、その場所や人物と交差することで危機に瀕した再生産領域が賦活されるという主題を表しているのだといえよう。

さらに重要なのは、夢は別のモチーフとも結びついていることであり、それが〈弱い父〉である。「大きな船が、貨車と隣り合わせのところに見えた。海を北に向かう船だ、と父親が教えてくれた。あっちの方へ行けば、もっともっと寒いんだ」と父親が多喜子に語る北の風景は、多喜子の「自分が船に乗っている夢」として見られる(「冬」)。この風景は神林との対話で「かわいいこと」として多喜子によって語り直され、「……でも、父もこわがってたのかもしれない。たぶん、そうだったんだわ。行きたかったから、こわかったのね、きつと……。」(「山」)と、父への理解が新しく修復さ

れる。

この父の理解には、本作をひとつの「風土論」として構想したという津島の証言が参考になる。「自分たち私たちが居るところ、つまり風土、文化ですね。つまり、〈山〉に閉じ込められていてね。息苦しいのだけれど懐かしいような、そういう感じのところまで皆が暮している。男もそういうところに居るのじゃないか、そういうところに居る男も実は非常に悲劇的なんじゃないか、それでもうただ荒れ狂うしかないのじゃないかと思うのよね」と津島は述べている（津島・栗坪 1981）。

多喜子の父が恐れる北の土地とは、彼の故郷である青森の先だが、それは戦後の〈弱い父〉がかつて望んでも果たせなかった越境性を象徴しているだろう。その越境性が現在時において多喜子によって夢を通して理解、想像されていること、また障害や民族との交差性のある男性性を担った神林によって体现されている点に、多喜子の「夢」があったのではないかならば夢の表象は、戦後日本の男性が直面した福祉レジームの脆弱性や「ケアの危機」の来歴を辿り、想像的に修復する小説の技法として現れているのである。

また、氷原のモチーフには神林の祖父が関連して書き込まれている点も見逃せない。神林の祖父はやりたいことを求めて北の地に自ら渡った人物だが、その点からは帝国日本の北への接近が開拓植民地的な欲望であったことが垣間見えるだろう。しかしその欲望は、障害をもつ子どもとの生活において、祖父のような「夢を持ちたくなるんだな」（「山」）と語る孫の神林から、植民地的欲望を相対化する交差的な欲望として語りなおされているのである。もちろんこの「夢」は理想としての意味合いだが、多喜子が何度も夢見る氷原の男たちに神林もその祖父も特徴が合致している点を考えると、そもそもこの二人こそが多喜子の夢見の結果として現象しているのだともいえ、これは夢による危機の修復とみなせよう。

この点にテキストの可能性の地平もあると思われる。すなわち他者である男性たちについての弱さや痛みを理解し、それを想像的に浮かび上が

らせ受け継ぐような機制が存しているということ。多喜子や神林が父たちの夢を反復し語りなおす行為からは、後年の作品にもみられるような他者の物語と交わることの萌芽が存在しているのであり、それが子どもを産み育てる視点を通して交差的な思考として現象させているのが『山を走る女』だとここでは位置づけたい。このような文学的想像力は記号化の暴力と紙一重であるが、しかし津島作品が、他者を想像し変容する主体を記述することの地平をひらいていることは明記されてよい。

戦後の〈弱い父〉の理想を理解して接ぐように、あるいは書き換えるように、テキストは夢を見る。それは、夢という技法によって現実に応答し、家父長制のあり方や開拓植民地的欲望を想像的に書き換えるような試みではないだろうか。そのプロセスは戦後日本の脆弱な福祉レジームや〈弱い父〉に対する文学的で修復的な解釈だといえるだろう。「もう一つの場所」を志向する津島作品の夢とは、他者の呼び声を解釈して現実を根本的に相対化するハイブリッドな文学的思考法なのである。

VI. 結びに

本作は、出産・保育の表象においては同時代の運動的な声と共鳴しており、福祉レジームの脆弱性のなかから、産む女性や保護者・保育者の経験や声を歴史的かつ社会状況的にすくい上げ、構造のなかで共同的に運営していく試みを見出すことができる。先住民である「ギリヤーク」やアイヌとの交差においては、戦後の〈弱い父〉というアポリアを乗り越え、外部から相対化する批判性がある。以上のような福祉レジーム・再生産領域の修復と、それを賦活する外部からの民族的交差の流れのうちにある思考法が、本作における夢の技法なのである。『山を走る女』は、再生産領域の危機を女性の側から描くだけでなく、その外部に位置づけられた男性性のアポリアや変容からも描き出している。そのなかで交差性は、同時代の社会構

造を描き出す主題だけではなく、再生産領域の再編成をめぐる想像力としても機能している。本作は社会的再生産を文学的に再配置し、危機を修復しようとするのである。それが『山を走る女』における社会的再生産をめぐるの応答なのだ結論づけておきたい。

津島作品は、このように戦後史の構造と物語の関係を交差的に考えることで、その微細かつ巨視的な相貌を確認できる。

注

- 1 本稿での『山を走る女』の引用はすべて『山を走る女』(津島 1980d)による。
- 2 こうした表象は中上健次を事例として渡邊英理が論じる戦後史の「(再)開発文学」の視座と重なる点が多くある(渡邊 2022)。中上と津島の関係は「(再)開発文学」や戦後の〈弱い父〉に連なって、テキスト同士が共振する広い視点から再考されるべきだろう。

参考文献

- 新井はるみ, 1985, 「連絡帳は保母と父母とのコミュニケーション」『保育の友』第33巻8号: p.25.
- Arruzza, Cinzia, Bhattacharya, Tithi and Fraser, Nancy. *Feminism for the 99%*. Verso Books, 2019. (恵愛由訳, 2020, 『99%のためのフェミニズム宣言』人文書院).
- 堂本暁子, 2001, 「高度経済成長と硬直化した保育制度の狭間に咲いた「あだ花」。ベビーホテル」櫻井慶一編『ベビーホテル』至文堂.
- 萩原久美子, 2010, 「「両立支援」政策におけるジェンダー」木本喜美子ほか編『社会政策のなかのジェンダー』明石書店.
- 橋本宏子, 2006, 『戦後保育所づくり運動史 「ポストの数ほど保育所を」の時代』ひとなる書房.
- Hill Collins, Patricia and Bilge, Sirma. 2020. *Intersectionality*. 2nd edition. Polity Press. (小原理乃訳, 2021, 『インターセクショナルリティ』人文書院).
- 藤田護, 2025, 「津島佑子『私』におけるアイヌ神謡——触発され口承文学化する「私」の揺らぎと広がり」『言語態』(言語態研究会)第19号: pp.81-93.
- 藤田真一, 1988, 『お産革命』朝日文庫.
- 飯田祐子, 2022, 「戦後日本の「ケアの危機」——津島佑子「ある誕生」「壇のなかの子ども」にみる子殺しと障害の交差」坪井秀人編『戦後日本の傷跡』臨川書房.
- 石原真衣, 2020, 『〈沈黙〉の自伝的民族誌——サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会.
- 木村朗子, 2021, 「フェミニズム小説としての津島佑子——『笑いオオカミ』『ナラ・レポート』を読む」『群像』第76巻3号: pp.279-308.
- 小林富久子, 2002, 「山姥は笑っている——円地文子と津島佑子」水田宗子ほか編『山姥たちの物語 女性原型と語りなおし』学芸書林.
- 村上克尚, 2020, 「動物から世界へ——津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴」『言語社会』(一橋大学大学院言語社会研究科)第14号: pp.112-28.
- 内藤千珠子, 2022, 「フィクションの暴力とジェンダー——『ジャッカ・ドフニ』が描く「アイヌ」の物語」石原真衣編『記号化される先住民／女性／子ども』青土社.
- 仁平典宏, 2019, 「社会保障——ネオリベラル化と普遍主義化のはざままで」小熊英二編『平成史【完全版】』河出書房新社.
- 小田光雄, 1997, 『〈郊外〉の誕生と死』青弓社.
- 尾形明子, 2006, 「山を走る女(津島佑子)——シングルマザーを生きる」岩淵宏子ほか編『ジェンダーで読む 愛・性・家族』東京堂出版.
- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社.
- 大沢真理, 2007, 『現代日本の生活保障システム——座標とゆくえ』岩波書店.
- 椎野若菜, 2014, 「日本の「シングル」から世界をみる」椎野若菜編『境界を生きるシングルたち シングルの人類学1』人文書院.
- 新川中原共同保育所編, 1981, 『育てまもり働く——乳幼児とともに歩んだ一〇年』新川中原共同保育所.
- 杉田俊介, 2017, 「いかに兄を障害児として産み直すか——津島佑子の初期作品から」河出書房新社編『津島佑子——土地の記憶、いのちの海』河出書房新社.
- 鈴木華織, 2019, 「〈原石〉に込められたもの——津島佑子「ジャッカ・ドフニ——夏の家」論」『法政大学大学院紀要』(法政大学大学院)第83巻: pp.118-30.

竹内渉, 2020, 『戦後アイヌ民族活動史』解放出版社.
 東海ジェンダー研究所編, 2016, 『資料集 名古屋における共同保育所運動 1960年代～1970年代を中心に』日本評論社.
 都留重人, 1990, 『地価を考える』岩波新書.
 津島佑子, 1979, 「ある母親たちの顔」『朝日新聞』1979年1月10日.
 ———. 1980a, 「書評 『樺太自然民族の生活』山本祐弘編著」『太陽』第18巻2号.
 ———. 1980b, 「新しい夕刊小説、〃山を走る女〃12日から連載」『毎日新聞』1980年2月8日夕刊.
 ———. 1980c, 「寄稿: 「山を走る女」を書き終えて」『毎日新聞』1980年9月19日夕刊.
 ———. 1980d, 『山を走る女』講談社.

津島佑子・菊田均, 1979, 「インタビュー・十二月 津島佑子氏にきく」『すばる』第1巻8号: pp.312-5.
 津島佑子・栗坪良樹, 1981, 「インタビュー・二月 津島佑子氏にきく」『すばる』第3巻2号: pp.274-81.
 津島佑子・山口昌男, 2000, 「流れる言葉、交わる言語」『新潮』第97巻1号: pp.300-22.
 山本祐弘ほか編, 1979, 『樺太自然民族の生活』相模書房.
 安井眞奈美, 2013, 『出産環境の民俗学——〈第三次お産革命〉にむけて』昭和堂.
 吉村典子, 1992, 『子どもを産む』岩波新書.
 渡邊英理, 2022, 『中上健次論』インスクリプト.

掲載決定日: 2026年5月11日

Abstract

Dreaming of Another Place: Intersectionality in the Social Reproduction of Yuko Tsushima's *The Woman Running Through the Mountains*

Yuki Sanbayashi*

When intersectionality is expressed in novels, what form does it take? This paper examines Yuko Tsushima's "The Woman Running Through the Mountains," a work where gender transgression has traditionally been the primary focus. It discusses representations of childbirth and childcare—deeply intertwined with gender—alongside representations of indigenous peoples, including the Ainu, within the context of contemporary social conditions. This analysis frames these representations as issues of intersectionality concerning social reproduction. Regarding representations of childbirth and childcare, we find attempts to historically and contextually capture the experiences and voices of birthing women and childcare providers amidst the fragility of the welfare regime, and to collectively navigate these structures. Regarding representations of indigenous peoples, we argue that a critical stance emerges, one that transcends and relativizes the postwar aporia of the "weak father." It then positions the novelistic technique in Tsushima's work as a mode of thinking, written as a "dream," situated within this flow of internal repair within the postwar welfare regime and the external intersectionality that revitalizes it.

Keywords: intersectionality, childbirth, shared childcare, weak fathers, indigenous peoples

* Doctoral Course of the Graduate School of Letters, Waseda University

